

「ああ、うまかった。」谷川の水で、のどをうるおした藤兵衛が二、三步あるきだしたとき、赤しやけた毛けりが一杯はえている太い腕が一本ニョキッと道にさし込まれました。

藤兵衛はきにもとめずにヒョッと腕をまたいだとたん、ワハッハア、ワハッハアと天をゆさぶるような笑い声が頭上の大木のしげみのあたりから聞こえたかと思うと、ふわりと雲をつくような天狗が、大きな団扇うちわを片手に目の前におりたちました。

「藤兵衛、お前は偉い奴だ。褒美ほうびにこれをやるぞ。」天狗はふところから鹿笛しかふえを取り出して与えながらいきました。「今度お前の家に行くからその時は女は全部よそにやっておけ。天狗に女は絶対に鬼門だぞ、忘れるなよ。」と念をおして立ち去りました。

やがて約束の日が来ました。

藤兵衛は速くから妻や下女たちに用事をいつつけて使いにだし、酒さけや肴さかなを準備して天狗の来るのを待ちうけました。やがて約束の刻限ときげんになったころ、裏の大杉にサワサワと天狗のおり立つ気配とともに「藤兵衛来たぞ。」とのっそり入って来ました。

そしてさっそく二人で酒もりを始めました。一方、使いにい出された藤兵衛の妻は、今日の夫の態度がふにおちません。だんだん不安になって来たうえに、一体何をしているんだらうと好奇心にかられ、抜き足、さし足家に帰って来てそっと戸の隙間すきまからのぞきました。とたんに、「藤兵